

# 同一課題による国際共同授業の試み

—カペラゴーデン美術工芸学校の学生作品の背景にあるもの—

Trial International Collaborative lesson using Common Subject

What serves as a backdrop to the student work of a CAPELLAGÅRDEN School of Arts and Kraft

● 小松研治、渡辺雅志／富山大学芸術文化学部

KOMATSU Kenji, WATANABE Masashi / The Faculty of Art and Design, University of Toyama

● Key Words : Sweden, Capellagården, industrial arts, design, conception, teaching materials, environment

## 要旨

今回実施した国際共同授業は、スウェーデンのカペラゴーデン美術工芸学校<sup>1</sup>、と富山大学高岡短期大学部専攻科産業造形専攻の学生が同一課題のもとで作品制作を行い、その成果を共有して相互の学生が発想の源泉を幅広いものにすると共に、作品の特色や教育方法について比較研究することを目的とした試みである。

同一課題は、日々の生活の中で使う「トレー（お盆）」の制作をテーマとして行い、その作品を交換して両校において作品発表展覧会を開催する手順で行った。

本稿では、カペラゴーデン美術工芸学校の学生作品に見られる幾つの特徴を抽出し、それらの特徴を作り出す教育方法等の背景について考察する。

## 1. はじめに

共同授業を行ったスウェーデンのカペラゴーデン美術工芸学校（以下カペラゴーデン）は、筆者らが1990年から1991年にかけて研修を行って以来、今日まで16年間にわたり研究と教育の交流を継続してきた学校である。この間に、カペラゴーデンの家具・インテリアデザイン科の教員・学生らが4度にわたって本学を訪れ、互いの伝統的木工技術、教育内容に関して意見を交わして親交を深めてきた。1991年には、カペラゴーデンの教員と学生達が来日し、旧高岡短期大学（現在は富山大学高岡短期大学部）を訪れ、帰国後に日本的要素を用いた個性豊かな家具類が学生の手によって制作され「日本の印象展」と題し開催されている。1996年と1998年にはカペラゴーデンの校長と旧高岡短期大学学長が、学生・教員間交流の可能性について意見を交わす機会を持った。一方、旧高岡短期大学木材工芸コースの卒業生も、延べ6名がカペラゴーデンに留学し、卒業後はその全員が家具製造業に携わっている。

こうした交流を重ねる過程で、両校には、制作に関する動機の見え、発想方法、使用者に対する分析態度、伝統技術等の違いについて、具体的なものを介して比較し、

優れた点を互いに取り入れようとする関心が高まり、共同授業を行う運びとなった。

これまでに、1996年（通産省海外動向調査事業）、1998年（フェローシップ派遣助成事業）と、カペラゴーデンを再び訪れた際に、「孫の手の共同制作」、「5歳児のための椅子制作」<sup>2</sup>を共同授業として行なう企画を立て、それをそれぞれの学校で実践し、成果を交換してきた。今回の取組は3度目の共同授業となる。

これらの授業は、同じテーマ・条件・制作時間内で作品を制作し、成果を交換して発想、技術等の違いや、作品に現れる文化・社会的背景の違いについても意見を交わす取組である。こうした共同授業の取組によって、学生の発想の源泉を多様なものにすると共に、双方の教育方法の優れた点を互いに取り入れるなどの効果を上げてきた。

本稿では、2006年度に実施した共同授業におけるカペラゴーデンの各学生作品を観察することによって、それらの造形の中から読み取ることの出来る特色を挙げ、その特色の背景にある教育方法等について考察する。

## 2. カペラゴーデン美術工芸学校

まず本章では、今回共同授業を行ったカペラゴーデンの設立の経緯と教育組織・方法について解説する。

スウェーデンにおける工芸教育は、1890年にオットー・ソロモンによって「スロイド」と呼ばれる手工芸教育訓練学校がナースに設立され、特に木工教育の分野においては美術工芸教育の中に、実用性、経済性、生産性等の要素を取り入れた新しい教育が始まっていた。このスロイドの校長職を一時的に引き継いだカール・マルムステン（1888～1972年）が、やがて独自に設立した学校がCarl Malmsten Workshop in Stockholm（現在のカール・マルムステン・スクール）であり、デザインと木工技術を指導して学生の作品をプロトタイプとして工業と結びつける成果を上げ、現在では北欧で最も優れた家具デザインの教育機関として運営されている。同校に

おける彼の教育理念は、過去400年に遡ってスウェーデンの木造建築を200点以上収集・復元した野外美術館“スカンセン”と、様々な農家の生活用具を収集展示した“北方美術館”に工芸の原点を求め、自然と共存した暮らしの中で作られた日常品から伝統的なものづくりの歴史や精神を学ぼうとするものであった。しかしカール・マルムステン・スクールは、ストックホルム中央駅に近いスルッセンに位置し、都会の学校であったため、若い学生は伝統文化から学ぶことよりも都会の刺激や流行の影響を受け、彼の教育理念とはかけ離れたものになっていった。やがて実際の生活体験と制作活動を一体化する必要性を強く求めるようになる。

こうして、工芸教育を学生の実生活と結びつける新しい試みの場として設立された学校がカペラゴーデンである。“工芸は自然の形態と秩序から学び、自然と共存する営みの中から生まれる”という理念を掲げ、「都会から離れ、自給自足に近い生活体験を通して、生活空間を作り出す家具、カーテン、陶器等を伝統に則った本物の素材と技術を使って制作する」教育を目指したのであった。

カペラゴーデンは、“風と太陽の島”と呼ばれ、現在は世界遺産に指定されているエーランド島にある。マルムステンは、ビッケルビー地区の古い農家の集落を購入し、1957年に工芸デザイン教育の場としてこの学校を開校した。「基本的な部屋の雰囲気を作るためには、家具と織物、そして陶器の調和が必要である。色彩はスウェーデンの風景から、模様は植物から、そしてフォルムはあらゆる自然の形態から学ぶべきである」として、家具・インテリアデザイン、陶芸、織物、ガーデンの4専攻制の教育体制を整えている。教育期間は2年間を基本とし、マイスター資格を取得する希望者はさらに1年間学ぶことができる。

今回の共同課題の対象は、家具・インテリアデザイン科の1・2年生12名で、入学以前に木工に関する何らかの経験を有している。

### 3. 共同課題と運営方法

今回の共同授業で両校が共同企画した課題は次の通りである。

#### (1) 共通課題

「トレイ（お盆）」の制作

#### (2) 条件

- ①制作時間は90時間以内  
(本学は18年度後期「造形工芸実習Ⅱ」にて実施)
- ②木を素材として同じデザインの作品を2個制作すること
- ③トレイに載せるものを考慮して発想すること

### (3) 課題の趣旨

「この課題は、カペラゴーデンの家具・インテリア科12名の学生と富山大学高岡短期大学部専攻科産業造形専攻の木材工芸を学ぶ学生6名とで行う。この二つの学校は、授業の形態や教育環境に異なる点はあるが、木工における手仕事の価値観や教育方針に多くの共通点がある。制作を通して、各学生の個性や異なる文化の背景などが、出来上がった作品に確実に現れるはずである。私達の目標は、この課題によって学生達に発想・技術の多様性を示して彼らの創造力を豊かなものにし、そして手仕事を通して新しい価値の創造へと導くことである。」

### (4) スケジュール

#### ①課題説明

- ・ブレインストーミング
- ・マインドマップ作成（作品についてのコンセプト、必要な技術の予測などの検討）
- ・スケッチとモデル制作

#### ②中間発表

- ・マインドマップ、スケッチ、モデル（模型）を用いて制作意図を発表

#### ③プロトタイプ制作

- ・製図、加工手順・方法の問題点の検討
- ・最終案決定に向けた個人指導

#### ④決定作品の制作

#### ⑤最終発表

- ・作品及び説明パネルを用いて発表

#### ⑥展示

- ・双方の学内での展示発表  
カペラゴーデン：オープンハウス(学内展示場)での展示「2007年1月28日～2月4日」  
高岡短期大学部：TSUMAMA-HALLにて展示(写真1)「2007年4月16日～4月20日」



写真1 本学部TSUMAMA-HALLでの展示の様子

共通課題を「トレー（お盆）の制作」に定めた理由は、日用品であるトレーには両国の食文化や生活様式の違いが必ず反映されるとの予測や、比較的短期間で制作可能なボリュームであることなどを考慮し、その上で、相互に発想やアイデアの源泉を多様なものにする効果が期待できると判断したからである。

また、トレーに載せるものを考慮する点をあえて条件とした理由は、トレーをそれ単独で考えることを回避し、載せる器の形態や運搬する動きを発想のヒントにさせる狙いがあった。

#### 4. 両校学生作品の比較

本学高岡短期大学部専攻科産業造形専攻の木材工芸を学ぶ学生とカペラゴードンの学生とでは、授業形態や教育環境、そして学生の生活基盤や入学時の専門に対する素養、そして学習期間に差があるために、作品の優劣を単純に比較することは出来ない。今回の共同授業に参加した高岡短期大学部の学生6名は、そのほとんどが高校卒業後18歳で入学し、それ以前に木材工芸に関する知識や技術を持ち合わせていない。一方カペラゴードンの学生12名は、入学以前に、ギター制作、木製ボート制作、車の車内デザイン、椅子の布張り、大工、家具制作等、木材加工、デザインに関する何らかの経験や知識を有して入学していることから、全く対等な実力の基に行なわれた共同授業ではない。両校の作品を比較する際にはこの点を十分に考慮する必要がある。しかしそうした経験・知識の違いはあっても、今回の共同授業で制作した両校の学生作品は、発想の着眼点、トレーとしての機能の面から見た評価は、制作者の名前を伏せてしまえばその作品がどちらの学生によって制作されたものなのか判別できないほど質の高いものであった。

高岡短期大学部専攻科産業造形専攻の学生作品は、トレーのフレームを2重にして好みの印刷物や子どもの絵などを敷くことによって、トレーの機能に絵画の額の役割を複合させた作品（写真2、3）、伏せて置けば無垢の木材に見えるという意外性を持たせた作品（写真4）、塩化ビニール合板を用いてメモ書きの機能を持たせた作品（写真5、6）、日本の古い和ガラスの窓から発想した作品（写真7）、運搬する時とテーブル上で使用する時に応じて両面を使う作品（写真8）、様々な薬味を入れて食事に彩を添える作品（写真9）など、トレーをユニークな視点から捉える優れた発想力が見られた。（写真2～9は高岡短期大学部学生作品）これらの点は、カペラゴードンからも高く評価された。

カペラゴードンの学生作品には、木材の活用方法の多様性や、載せるものに対応させる造形、使い手に対する堅実な配慮、可動部分を取り入れるデザイン・技術力等

の点で優れた作品が多く見られた。（写真10～25はカペラゴードン美術工芸学校学生作品）

次章では、技術的にも完成度が高く、利用時の配慮に優れたカペラゴードンの学生作品に見られる特色について、さらに詳細に見ていくことにする。

#### 5. カペラゴードンの学生作品の特色

##### （1）多様な樹種の活用

木材は、樹種によって硬さ、柔軟性に差があり、各樹種に固有の色彩や木目模様が現れる素材である。12人の学生作品には、マホガニー、チーク、ホワイトアッシュ、樺、松など、延べ12種類の木材が使われていて、表現しようとする作品の印象や加工方法に適した樹種が意図的に利用されている（写真10～25）。

##### （2）伝統に根ざした堅実な木工技術

部材の接合部には、ホゾ組み加工技術、引き出しの蟻組等の接合技術が見られる（写真12、13、21）。また、左右、前後に同じサイズの部材を使用する際には同じ無垢の材料を2枚に割り、対象に配置するなどの伝統的部材の利用方法が守られている（写真14、15）。さらに、二つの引き出しの前面に来る木目が、左右でつながるように使用されている作品（写真13）や、板を左右対称に貼り付ける「ブックマッチ」と呼ばれる木目の使い方（写真13、16）など、構造や視覚的な美しさにも配慮された作りになっている。

##### （3）合板成形技術、曲げ加工技術、木象嵌技術

板材を使用した作品には、薄い板を重ねて作る合板技術や、比較的安価な材料で作った心材の表面に、特に美しい薄い板を化粧板として貼り付ける「練りつけ合板」と呼ばれる技法が使われている。合板技術は無垢材の代用品としてではなく、幅の広い部材の変形を防止する目的を持った技法として取り入れられていることが分かる（写真10、11、15、23）。また、木材を曲げる技法が取り入れられた作品が4点（写真10、13、18、19）、様々な色彩を持つ樹種の薄板を切り合わせて模様を作り出す象嵌技術を使った作品が3点見られた（写真10、11、14）。これらの加工技術は、無垢材に拘り、組む、削り出すなどの方法によって成形することが主流である我が国の場合と異なり、より経済性、量産性を意識した技法として積極的に教育に取り入れ、制作に生かされていることが分かる。

##### （4）木材以外の素材を取り入れた造形

マグネットが使われている作品が3点ある（写真16、20、25）。そのことによって木材だけを使用したのでは

でき得ない構造を作り出し、異なる素材の効果を積極的に利用しようとする姿勢が窺える。

#### (5) 可動機構・構造を作品に組み込むデザイン力

12名のうち7名の学生が可動部のある作品を制作し、造形の幅を多様なものに行っている(写真10、11、13、19、21、23、24)。家具・クラフト製品の中に可動部を作る際には、高い加工精度が必要となるために、より高度な知識と技術力を有していることが分かる。

#### (6) 電動工具を使った加工技術の導入

木材を切削する際に使用される手道具は、鋸、ノミ、鉋が主なものとして考えられるが、ハンドルーターと呼ばれる電動工具を使用した痕跡から、使用する道具の範囲を手道具に留めず、電動工具による加工を基本的技術として指導している様子を読み取ることができる。(写真10、11、22)

#### (7) 課題の解釈の多様性

カペラゴードンの学生作品には、玩具的要素を持たせた作品(写真10)、腹部に密着させて持つことの出来る作品(写真18)、脚部をたたみ、高さを変えることのできる作品(写真16、23)、ロール状に丸めることのできる作品(写真24、25)、スケッチブックを入れて携帯できる作品(写真11)等々、多様な発想が見られる。また、ワインを運ぶために詠えた作品(写真21)、フィンランドの食器メーカー「マリメッコ社」食器の絵柄から発想した作品(写真10)等、載せるものを考慮する課題条件に対して発想の多様性が見られる。

#### (8) 使用者の動きに対応した造形

スウェーデンには「スナップス」と呼ばれる向かい合ってお酒を飲む楽しみ方がある。そのために作られたトレイには、日本のお猪口に似た器を収納する引き出しがあり、これを前後に押し引きして好みの器を選ぶことができるように作られている。引き出しが前後にスライドするため、運搬中に滑り出ない様に引き出しの底板の裏にはマグネットが仕込まれていて、中央で止まるように工夫されている(写真13、20)。

ワインのデカンタとグラスを運ぶために作られたトレイでは、運搬中の安定性を考慮し、運搬時は観音開きの蓋によって固定され、取り出した後は平面が確保される工夫が施されている(写真21)。

野外に多くの料理や食器を運び出すときに使う大型トレイには、両手で持ったトレイ自体を腹部に密着させる曲線を施し、必要な力を軽減させる工夫が盛り込まれている(写真18)。

これらの工夫には、使い手の立場や使われる場面をはっきりとイメージし、使用者の動きに対応しようとする意識が強く感じられる。

### 6. 特色を作り出す背景

前章では、カペラゴードンの学生作品に見られる特色をいくつかの切り口から詳しく述べてきた。確かに、作品に見られる特色は、制作した各学生の高い能力によって作り出されたものではあろうが、特色を作り出す教育的背景に関心を移してみたい。そこで次章からは、これまで継続して調査してきたカペラゴードンの教育方法や教育環境面について考察を加える。

#### (1) マルムステンという手本を持つ強み

カペラゴードンの創立者であるカール・マルムステンはその生涯において、椅子、テーブル、キャビネット、照明機器、時計等、1000点以上を設計・デザインし、その多くが商品化され、一部は現在でも商品として継続生産されている。1972年に没するまでの間、彼はカペラゴードンの敷地内に住み、彼のデザインした家具類は学内の様々な場所で使用されていた。現在でも、朝の集会で学生が座る椅子や、図書館のテーブル、椅子、食堂の食器棚など彼のデザインした家具類が惜しみなく配置されて実際に使用されている<sup>3</sup>。彼が生活していた住宅は、現在ではオフィスとゲストルームとして使用されており、生前に彼が過ごした部屋には、調度品が当時のままに配置され、学生はいつでもそれらの品々に触れ、その穏やかな空間を味わうことが出来る。このようにして、学内の様々な場面に美しくデザインされた家具が置かれ、それが鑑賞用の美術工芸品としてではなく、実際に使用することが許され、素材の利用方法や機能性、快適性、さらにデザイン理念を学び取ることが出来るように工夫されている。こうした環境が、学生作品に見られる堅実な技術や発想の多様性を生み出すことに影響を与えているように思われる。

#### (2) 多様なゲストティーチャーの招聘

カペラゴードンの家具・インテリアデザイン科の専任教員は2名である。これに加え学外から多彩な講師を招いて行われる授業が頻繁に開講される<sup>4</sup>。こうした授業では、弓を作る作家、ろくろ作家、木象嵌の専門家、水彩画家、椅子の布張り職人、伝統的塗装の専門家、写真家、建築家、玩具デザイナー等々が訪れて短期間の授業を行っている。こうした多彩な専門化との出会いが、学生の発想力を刺激する機会になっているのではないかと考えられる。

### (3) 多様な木材加工技術の指導

本学部では、木工の基本技術習得の範囲を、無垢材を使用して組む、彫る、挽く加工を主な技術として定めている。一方、カペラゴードンではそれに加えて、無垢材を蒸す、あるいは薄い板を重ねて型に挟み、圧着して曲面を整形する曲げ加工、薄く加工された化粧板を合板の表面に張る合板整形技術、そして様々な樹種の色・木目を組み合わせて模様を作る木象嵌技術を工芸品制作の基本加工として位置づけている。こうした多様な技術の経験が、作品の発想に大きな影響を与えているように思われる。

また、カペラゴードンの作品制作課題では、同一デザインのを2点以上制作することが多い。同一デザインの製品を複数製作することで部品の互換性や高い加工精度の必要性を知り、ジグや固定具を自分自身で工夫させるのである。これらの教育方法は、技術力や作品の完成度を高めている要因と考えられ、卒業後の工房経営や、デザイナーとして自立する際に必要な能力として行われている。

### (4) ものに語らせる教育環境

家具・インテリアデザイン科の工房には、様々な接合部の構造見本、樹木見本等が配置されている。カペラゴードンの教育方法は、継承、活用すべき情報を暗黙知として学生から目に見えない、手の届かないものとするのではなく、技能の多くを具体的な形にして配置し、学生が自ら学び取ることの出来る「見る・触れるからの発想」教育環境を充実させている<sup>5</sup>。

### (5) 材料の提供システムの充実

カペラゴードンの家具・インテリアデザイン科では、学生が授業で使用する木材のストック、支給等の管理体制をきめ細かく行っている。木材機械室の一角には乾燥した木材のストックコーナーがあり、学生は課題に必要な材料を自身で選び出し、すぐに加工機械を使った作業に移ることができる。木材は20種類程度の木材が用意されていて、各樹種に固有な色彩・木目・性質等をデザイン上の要素として考慮しながら吟味選択し、取り出しやすい工夫がなされている。野外には人工乾燥室があり、次にストックされる材料の乾燥が授業として行われ、木材の特性に関する理解を深めている。こうした材料の管理体制が、樹種に対する知識を深め、制作に必要な材料の選択意識を積極的なものにしていくように思われる。

### (6) 発想を促す生活環境の提供

カペラゴードンの学生達は、学校の敷地内に設けられた伝統的スウェーデンスタイルの住宅を共同で使用し学

生生活を送っている。各学生が使用する部屋には、カペラゴードンの卒業生達が制作していった椅子やテーブル、食器棚、陶器類、裂き織りマット、照明機器等や、カール・マルムステンがデザインした家具類が惜しみなく配置され、日々の生活の中で使われている。これらの作品は、素材の美しさ、機能性、構造等の面から見て十分に考え抜かれた秀作ばかりである。使用する学生達は、これらの作品を実際に使用することによって、作り手が作品に込めた深い配慮に素手で触れることになる。こうした工夫は、生活の場と学ぶ場を切り離すのではなく、生活の中から作ることを意味を学ぶように考え抜かれた仕掛けなのである。<sup>6</sup>

家具・インテリアデザイン科の機械工房は、機種ごとの専用工具棚や替え刃棚などが使いやすく整理され、作業場の隅々まできめ細やかな配慮が尽くされている。これは学生が輪番制で工房の管理・改善に当たる「工房長」システムによって作られてきたものである。工房長によって制作・設置された工具棚などは整理整頓に役立つばかりでなく、これから棚を制作しようとする学生の教材として利用することも考えられている。当番に当たった工房長には、学生の集団から距離を置いて他の学生の「動き」を観察する視線が要求される。工芸品制作にとって、他者に対する配慮の精神が重要であるということに気付くことが期待されている。工房長による改善は、長い年月の間に蓄積され拡大していく。一度作り出された工夫が次の工夫の手がかりとなって新たな改善を生み、この環境を共有する他の学生は、“作り手のお陰”を感じ、使い手に配慮するデザインの重要性を実感するのである。<sup>1</sup>カペラゴードンの12名の学生作品に見られる使い手への配慮は、こうした日々の活動によって養われていると思われる。

### (7) 理念に即した教育方法

カペラゴードンにおけるカール・マルムステンの教育理念は次のようなものである。

『カペラゴードンでは、個人の創造的な能力が、作品の奇抜さや意表をついた驚きとして発揮されることより、長い伝統と多くの試練に耐えて使い続けられてきた技術や知識と強く結びついて現れてくることを目指す。発想やアイデアの源泉はいつも先人の残した伝統あるいは知識を基礎とする。その伝統は無形のものではなく、作業場、思索や語らいの場、知識の伝承方法をはっきりとした形にし、誰もがそれを自由に利用できる全体環境として提供する。制作の訓練は、こうした長い時間をかけ、試行錯誤によって出来上がった場でなされることを基本方針とする。

カペラゴードンの制作課題のほとんどは、われわれが

生きている現実の生活からかけ離れることなく、具体的に平静な日々の中で必要と感じるものに向けて出題する。「われわれ」という対象は、主に使用者としての他者であり、そこに制作の動機や配慮を求めていく。生活に欠かせない木製の椅子や机、ベッドや本棚、陶器、雰囲気などを大きく左右する織物などに関心を払い、その使用者としての経験も同時に積み重ねなければならない。

時には、家具・インテリアデザイン、陶器、織物、菜園の各専攻を有機的に融合させ、発想と刺激の源泉を幅広いものにするとともに、他専攻の制作者との人間関係も深め、境界領域で制作する場合での共同作業の訓練を目指す。

伝統につながり、生活全般に拘った制作は、自ずとその作品に「信頼性」を要求する。ここでいう信頼性とは、技術がしっかりしていること、使いやすいこと、制作意図が誰からも明確であり、モノを介した共感が得られることである。カペラゴードンでは、以上の教育によって、家具職人や工芸家、あるいは家具デザイナーや経営者の育成を目的とする。』\*1

カペラゴードンの教育理念はこのように明文化され、教育方法や教育環境はこの理念に沿った形で具体化され、実践に移されている。工房や学生生活の場に優れた作品が配置されている点や、生活を通して必要性を実感し、信頼性の高い実用品を伝統的技術によって作り出す教育は、明確な教育理念に沿って意図的に作り出されているように思われる。12名の学生作品に見られる堅実な技術や、奇抜なひらめきではなく生活に即した発想からは、こうした理念の影響を強く感じる事が出来る。

## 8. おわりに

今回の試みを通して、両校学生による工芸品制作のアプローチの違いを具体的な作品によって知ることができた。カペラゴードンの学生作品は、木材の特性に対する知識、高い加工技術、条件から発想する能力の高さ、使い手に対する深い配慮等の点で多様であり、学ぶべきものが多かった。そして、こうした特色を作り出す背景には、幅広い伝統的木工技術を伝承している点や、学内に優れた作品を数多く配置し、ものに語らせる教育環境を充実させて、発想を豊かなものにしていく点、そして明文化された教育理念に基づく教育方法を実践している点などが要因として考えられた。

今後も、こうした共同授業を継続して、学ぶべき優れた点を工芸教育に取り入れながら、芸術文化学部の特徴を創出していきたくと考えている。

## 謝辞

今回の共同授業の運営にあたり、課題作成の過程で内

容のニュアンスを正確に通訳し、また新聞記事を訳して頂きましたヒロミ・バレンタインさん、そして途絶えることなく本学部に関心を寄せていただきましたカペラゴードン美術工芸学校のキャレ・マグヌス・パーソン、ベントの両先生、さらに授業に参加していただきました12名の学生の皆様に、深く感謝申し上げます。

## 注釈

\*1 本理念は、以下の資料をもとに、筆者（小松研治）が訳したものである。

カペラゴードン美術工芸学校木材工芸専攻、「椅子展」カタログ、カルマル市デザインセンター、1996

## 参考文献

1. 小松研治、「実生活に生きる工芸」についての一考察－カペラ・ゴードン美術工芸学校の例を中心として－、平成5年3月、高岡短期大学紀要、第4巻、pp.91～pp.105
2. 小松研治、木工を学ぶ木工を教える－新しい木工教育の試み－、平成9年10月、ウッディーハンズ「週末の木工」PW通信社、pp.139～pp.146
3. 小松研治、カール・マルムステンの教育理念とその実践の場、平成19年6月、株式会社竹中工務店季刊誌approach、第178号、pp.5～pp.9
4. 小松研治・小郷直言 カペラ・ゴードン美術工芸学校を再考して－使用者の体験を重視する工芸教育－、平成9年10月、高岡短期大学紀要、第10巻pp.69～pp.89
5. 小松研治・小郷直言 工芸技法を伝える模型と教材の役割－木材工芸技法の伝承における模型の活用を例に－、平成8年11月、高岡短期大学紀要、第8巻pp.89～pp.106
6. 小松研治・小郷直言 作業環境の共有、平成11年3月、高岡短期大学紀要、第13巻pp.51～pp.66



写真2 好みの絵を入れて、額としても楽しむことができる。



写真6 トレーに情報伝達の機能を持たせたアイデア。



写真3 内側のフレームはトレーの裏側から押し上げて外す構造。



写真7 和ガラスと格子が日本的。器を置く時下が透けて見える。



写真4 裏返すと無垢の木材に見える意外性が楽しい。



写真8 浅い面で食べ、深い面を後片づけに使う両面使いの構造。



写真5 任意にメッセージを書くことができる。

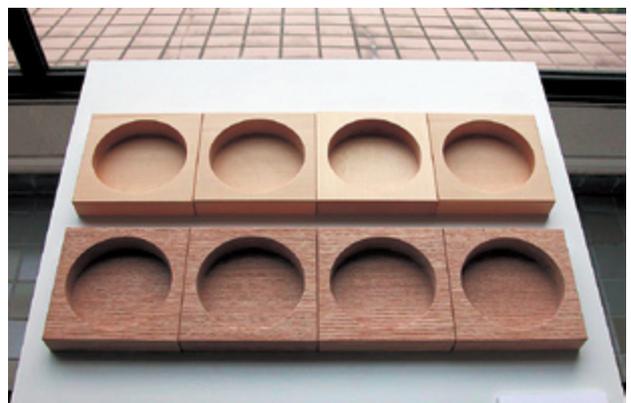


写真9 様々な菓味を入れて食卓を飾る。



写真10 器の絵柄を利用したパズルとトレーの2重構造。



写真14 木象嵌の技術を用いたトレー。



写真11 トレーの中にはスケッチ用具が収納されている。



写真15 隅々まで木目の調和に神経が行き届いている。



写真12 細く薄い材の構成で、通しホゾが意匠として美しい。



写真16 美しい薄板の張りあわせ。脚はマグネットで固定。



写真13 引き出しは両側から出し入れできる構造。



写真17 写真11の内部。引き出しが滑らかにスライドする構造。



写真18 重いトレーを腹部に当てて持ち運ぶための曲面を持つ。



写真22 ハンドルーターを使用した様々な溝加工。



写真19 持ち手が格納される構造。曲げ加工は成形合板の技術。



写真23 写真16の脚が出ている状態。



写真20 写真13の引き出し裏のマグネット。中央で止める工夫。

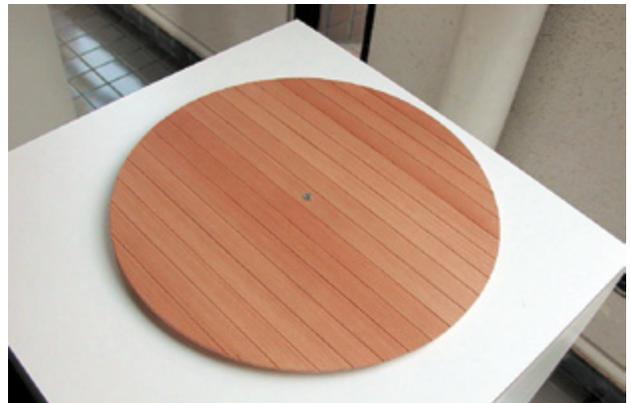


写真24 針葉樹の松材を細い棒状にして使用している。



写真21 デカンタとワイングラスを安定して運ぶためのトレー。



写真25 裏のマグネットバーを外して、写真24を丸めた状態。